

日風集

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第42号 2002年1月1日



企画展

「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」から

狐面

岡豊山に、子狐が遊びに来ました。

子狐A「見晴らしが良いところやね」

子狐B「最近、岡豊城の表門が見つかったらしいで」

子狐A「あれが岡豊城かえ？」

子狐B「違う違う。あれは歴史館よ。」

土佐の張り子面やら全国のおひなさまやら今展示しちゅうと」

子狐A「ほいたら行ってみよう」

：かつて土佐の各地には、小正月にカイツリという行事がありました。子どもたちが変装して家々をまわり、餅や菓子をもろうという行事でした。若い衆が娘さんのいる家を訪ねてごちそうを振る舞われる地域もありました。このカイツリの変装に、こうした張り子面が使われていたということです。

カイツリは、今では一部の地域でしか行なわれていませんが、張り子面は今も作られています。狐面の他に青鬼やしばてん、石川五右衛門や弁慶といった、民話や歌舞伎の愛すべき主人公たちが張り子面のモチーフになっています。

この狐面は、安芸市の穂積保徳さんが作った山本香泉さんの流れをくむ土佐の張り子面です。

「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」に寄せて

会期 平成14年2月2日(土)～4月7日(日)

中村 淳子



土佐の郷土玩具

初公開のおひなさま

今回の企画展「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」では、楽しい展示になるように心がけました。

訪れた皆さんには、見る楽しさにワクワクしていただこうと思うのです。なにせ展示するのが郷土玩具ですから、かわいいものばかりです。しかも、郷土玩具はかわいだけではありません。

郷土玩具は日本の各地で土や紙、木などの身近な材料をもとに手作りされてきたふるさとのおもちゃです。手作りですから、ひとつひとつ表情が違い、作り手の存在が感じられて、見る人の心をほのぼのと温めてくれることでしょう。

また、各地で手作りされてきたおもちゃですから、郷土玩具によって地域の色や暮らしの様子を知ることできるのです。そこから発見の楽しさを引き出し、ゆきたいと思います。

その案内役として、ふくろう博士に登場してもらいます。これは、山本香泉さんという郷土玩具作家が作った土笛のふくろうです。ドングリ眼に小さなくちばし、ぶつくりお腹がキュートでしょう？ 会場のパネルでは、ふくろう博士が来館者の皆さんにクイズを出すといった趣向をとりますので、皆さん挑戦してみてください。

土佐の郷土玩具と言えば、相合傘に鯨車、女だるまに土佐風などが有名どころ



ふくろう(土笛 高知)

ですが、あまり知られていないこんなユニークなキャラクターがたくさんいるんですよ。今回の展示では、繊細な美しさに満ちたものから、思わず笑いがこぼれるちよつと……な人形まで、土佐の郷土玩具が約三〇〇点、展示室で皆さんをお待ちしています。

また、土人形のおひなさまを雛壇に並べてみたり、土鈴を鳴らしたり、からくり郷土玩具を動かしてみる、「おもちゃであそぼう」コーナーも楽しいですよ。

見る楽しさ・発見の楽しさ

平成一一年六月から山崎茂さんのコレクションを紹介しようと考えて、一、二月に一度の割で山崎さんの人形部屋通いをはじめました。山崎さんは、申年生まれで今年八一歳、三三年かけて郷土玩具を集め、その数、約一二〇〇〇点です。そんな山崎さんの人形部屋は、お嬢さん

宅の二階に二部屋あって、かねてより山崎さんがおっしゃっているように家族の理解を得てできたコレクションであることがわかります。

今回の企画展の準備は、山崎さんと共同で進めてきました。人形部屋では、土佐の郷土玩具や雛人形をひとつひとつ計測して写真を撮りました。その間、山崎さんにそれぞれについてお教えいただきましたが、郷土玩具の産地を訪ねて全国を旅してきた山崎さんならではの、楽しいお話も聞かせていただいたことでした。

ちなみに、山崎さんは「人形がある」でなく、「人形がいる」とおっしゃいます。そんなところからも郷土玩具に寄せる山崎さんの思いが伝わってくるのでした。

山崎さんの人形部屋

山崎さんとの出会いは、平成六年度の企画展『おもちゃー遊びのかたちー』を担当した時に遡ります。同展は、山崎さんが土佐の郷土玩具収集家の大先輩として仰ぐ、城田政治さんのコレクション（当館蔵）を展示したものでした。

それ以来、当館では特別展「からくり

夢と科学の世界』や民俗展示室の企画コーナーなどで山崎さんのコレクションを

の郷土玩具を展示しています。今年の午にはユニークな造形のものがたくさんあ

ら今回初公開するのが全国のおひなさま約一五〇点。人形部屋から出たことのない箱入り娘たちです。



中山人形（秋田）



帖佐人形（鹿児島）



雛土鈴のいろいろ



萌雛（群馬）



香泉人形（高知）



三春張り子（福島）

土雛の素朴な美しさや小さな雛のかわいらしさを、どうぞ愛でてください。また、上巳の節供行事を偲ばせる鳥取県の流し雛や鶴岡の建前雛、紀州田辺の船霊などマジカルな側面が色濃

い雛も展示します。

その他にも女の子の節供にちなみ、おぼこや立娘、ままご道具など約五〇点を展示し、山崎さんの郷土玩具の他に雛軸や十軒店の内裏雛なども紹介しま

す。さらに今回は、前回のおもちゃ展ではできなかった郷土玩具が出来るまでの過程を展示することでパワーアップさせました。城田さん亡き後は、山崎さんがご自分のコレクションを郷土玩具の復元や普及に役立てています。だからこそ、郷土玩具作りの今を記録することが今回の展示には欠かせないと思ったので

す。山崎さんの人形部屋からやってくる人形たちを一人でも多くの方にご覧いただき、郷土玩具の魅力を理解していただくことが、山崎さんと私たちの願いです。

お借りして展示してきました。また、山崎さんは、高知市民図書館で、毎年干支

るので楽しみです。そんな山崎さんのコレクションの中か

日本の考古学と土佐

立正大学教授（前立正大学学長・文学博士） 坂詰秀一

歴史民俗資料館で開催中の特別展を拝見しました。開館一〇周年ということで大変おめでたい限りであります。

日本の考古学は、いろいろな分野でいろいろなことが提起されてきています。将来の考古学の展望を考える時、考古学そのものの発達のあり方をみるのが非常に重要であります。特に日本の考古学は地域研究の総合として、研究者が恩恵を受けています。日本の考古学の在り方

と土佐との相関関係について私なりに考えていることを若干話させていただきます。

私が考えている考古学とはどんな学問かということから話を始めることとします。この度の歴史民俗資料館開館一〇周年の特別展は「二一世紀へ伝える文化遺産」ということが趣旨になっています。扱われている内容については弥生時代から近世に至る、主として信仰に関するものに視点をおいてプランを立てられています。これらの資料を総括して、「文化遺産」という表現をされています。一口に文化遺産といってもいろいろな要素があります。

考古学は物質資料によって過去の歴史を研究する学問といわれています。しかし、考古学という学問が石器の捏造問題に例をあげられるように最近非常に揺らいでいます。考古学が科学として存在し得るのかという人ささえもいます。様々な意見をきいて、歴史の研究というのはどういう視点で行っていかなければならぬのか、その問題点を研究していく必要があります。

大学で学生には歴史の研究というのは

三つの方法がある、ということを常々聞いています。一つは文献資料によって極める方法（文献史学）があります。二つ目には物質的資料によって研究する方法（考古学）、三つ目には伝承民具を主として研究する分野（民俗学）があります。

この三分野の長所短所を踏まえて考えなければ歴史の真実の姿は捉えられません。これが私の基本的な考えです。今回の特別展で扱われているのは銅矛などのほか、鱧口・御正体を含めた物質的材料、絵画・彫像資料、文献資料があります。いずれか一つの方法によって過去の歴史を明らかにすることは不可能です。私が学生の頃は「考古学は文献史学の補助であるから考古学で論文を書いてもだめだ」といわれていました。現在ではそういうことをいう人はなく、考古学の研究成果を頭に置かなければ歴史の真実の姿は掴めないという方も増えました。隔世の感があります。

では考古学の方法とはどうなのか、ということから話を進めます。私が学生の頃は文字が無い時代を研究するのが考古学といわれていました。今から三〇数年前、初めて外国へ出かけ、インドの釈迦

関係の遺跡の調査に行き、それ以外にも有名なインド国内の遺跡を訪ね歩きました。その遺跡の一つがタージマホールです。そこには「インド考古調査局」という看板がかかっています。タージマホールはイスラム関係の遺跡です。ニューデリーの国立博物館では回教関係の資料がたくさん陳列されていました。当時、私は新しい時代の遺跡への関わり方があまりよくわかっていませんでした。日本の博物館の展示では考古分野ということとせいでい古代くらいで止まっているのですが、インドではごく新しい時代の資料まで陳列していました。カルカタではギリシ植民地時代の建物があったが、そういう保存はインド考古調査局が担当しています。インドの考古学は新しい時代の物質的資料を扱い、イギリスの考古学と同じであるということがよくわかりました。イギリスでは産業革命の考古学というのがさかんに研究されています。

我が国の考古学は三〇数年前まではやはり文字の無い時代の研究が中心でした。あっても奈良時代から平安時代までの仏教関係の遺跡遺物を研究の対象にしていく程度です。最近はごく新しい時代を研究対象にするという動きがでてきています。一昨年、日本考古学協会では研究の進展をまとめた一冊の本を刊行しました。各時代で担当を決め、私は近世を執筆することになりました。オフィシャルな機関で近世を取り上げるといって



2001. 8. 25 講演中の坂詰博士 於 高知県立美術館ホール

に考古学の現代的状況が示されていると痛感します。近世の考古学は、東京（江戸）を中心に発達してきた分野で、高知との関連では、有楽町にあった東京都庁の庁舎を取り壊し、その跡地へ国際フォーラムの施設を作ることになり、調査が行われました。その地域は土佐藩と阿波藩の上屋敷があった場所です。その屋敷地から木樋の上水道が縦横に検出されていました。阿波藩の屋敷との境には溝があり、その幅は約二メートルありました。そこから大量の遺物が出ました。その中で注目したのは八〇〇はあろうかというほどほとんどが完形品の酒の徳利です。「さすが、土佐藩」と調査員がいつていました。明治四年に屋敷を引き上げる時に置いていったものでしょう。近世は調査の範囲に入っていませんでしたが、調査することにより新たな歴史認識を得ることができません。会津藩の屋敷地の柱は全て抜き取られていましたが、伊達藩のものは残っていました。対照的事例であり、明治新政府の対応の仕方がよく表れています。一つの遺跡から発せられる情報というのとはどんな時代のものであっても変わりありません。遺跡・遺物という物質的材料はその内容を雄弁に語ります。

新しい時代を考古学の研究対象とする風潮はごく最近おこってきたといいますが、昔からこういう風潮は日本の考古学界にもありました。ある段階で途絶えました。明治時代の先輩方は中・近世についても非常に意欲的に研究してました。各地域の考古学の研究成果をみると古代から近世に至る材料が考古学的研究手法で我々の手に受け継がれています。文字の無い時代の考古学研究については中央の研究者によることが多いですし、考古学の概説書は古墳時代で止めていますから、考古学とはこういうものという印象が世間一般にもたれています。神奈川県の石野瑛氏は昭和の始めに『考古要覧』を書かれ、中世・近世についても網羅されています。その意味で地域の考古学研究は重要な意味をもっていますから、日本の考古学は地域の考古学から見直す必要があります。「考古学は物質的資料によつて過去の人類の生活を明らかにする」と大学では講義されています。この中では文字の存在する時代を研究するとは一言もいつていません。中央の考古学研究者はかつて過去を文字の無い時代と恣意的に位置づけてきました。地域の方々は率直に考古学とは昔のことを研究すると受け止めていました。

の、鰐口・御正体は伝世（地上に存在）されているものです。それらとともに物質的資料なので、考古学の研究の対象となり得ます。埋蔵されている資料は考古学にとつて非常に重要視されます。発掘された資料というのは偶然に見つかり、その資料の歴史的必然性を考えていかなければなりません。これが考古学に与えられた命題であろうと私は考えます。偶然的な資料を必然化して歴史における物質的資料として考えていかなければならないのです。

従来、地域の歴史研究は「郷土史」と呼ばれ近頃は「地方史」と称されています。地方というのは中央に対する地方という意味をもつことから、最近では「地域史」と呼んでいます。地域史の総括されたものが日本列島の歴史ということになります。開催中の特別展を見ると、まさに二一世紀へ伝えていくべき文化遺産というイメージが彷彿と湧いてきました。次に配布した表について説明させていただきます。考古学についての研究をみていく場合にはまず発見・発掘があります。それに基づいて展開していく研究、あるいはそれを支えていく学会があります。その基には研究者の方々の姿があるということです。この表をつくりました。この表の発見と発掘で、明治一〇年のところは大森貝塚があります。大森貝塚に關しては土佐と密接な関係があります。大森貝塚発掘調査の報告書でモースを手助けした松浦佐用彦が高知出身者であるということが岡本健児先生のご研究でわかっていきます。東京の谷中墓地に松浦の墓があり、その墓標の裏にモースが追悼文を書いています。それを読むと松浦が大森貝塚に關与し、報告書の作成に關わったことがわかります。松浦は若くして亡くなったためにその後の考古学史上に位置づけられることはありませんでした。しかし、大森貝塚が土佐の人によつて発掘されていたことは明らかな事実です。

明治一九年に東京人類学会が結成されました。ここから日本の考古学が本格的に進んでいきます。その時に、坪井正五郎がこの学会の中心人物として活躍しました。坪井は「モースと師弟関係はない」といつています。明治の新しい学問をうち立てようとする若い研究者の意欲が感じられます。その学会に参加したのが、高知の寺石正路先生でした。この方については平成二年二月に「土佐・郷土史の父 寺石正路」と題し歴史民俗資料館で企画展を行っています。この寺石先生が宿毛貝塚を明治二四年に発見し、そのデータを東京人類学会の会誌に発表したということは当時としては非常に驚くべきことでした。すでに明治時代において東京の人類学会と土佐とが寺石先生を通じて結びついていたのです。寺石先生と徳島の鳥居龍藏先生が四国を代表する考古学者ではなかったかと思えます。鳥居先生はその後、フィールドを世界に拡げ

ましたが、寺石先生は郷土史研究をコツコツと積み重ねました。土佐は明治の段階で中央と密接に結びついた研究がなされていきました。

明治二八年には考古学会（後の日本考古学会）ができました。人類学会は先史時代の研究を行っていて、考古学会にはもっと新しい時代、文献の存在する時代について研究する方々が集まり、後に東京の帝室博物館を中心に研究が進められました。しかし、考古学会が研究対象としている新しい時代の研究はあまり高く評価されませんでした。

大正時代になると、考古学の研究が本格的に進みました。宮崎県（日向国）西都原古墳群の発掘調査が行われました。

神話の実在とその背景を考えるのが主とした目的だったようですが、初めての本格的古墳の調査でした。そして以降、史跡名勝天然記念物がさかんに指定されるようになりました。国分寺は大正一一年に内務省によって指定されました。その前提として大正八年に史跡名勝天然記念物調査会が発足しました。戦後、昭和二六年に文化財保護法が改訂になり、文化財審議会ができました。そして翌年、高知県文化財調査会が発足しました。この会は昭和五〇年に高知県文化財保護審議会となり、現在も続いています。土佐史談会が大正時代、早い時期に発足したという事は注目すべき点であろうと思います。「土佐史談」の創刊号から丹念に

みていくと、考古学資料についても触れられていっていると思います。土佐史談の考古学的調査をやってみると高知県考古学の歴史がわかるでしょう。伝統は先輩の力によって現在に至っていると私はつくづくと感じます。

江戸時代にも考古学的な研究の動きがあったということを知ることができます。松野尾章行は図面を筆書きにしています。各地へ行くとき資料を筆書きにしたものを見ることができ、そういう流れの中に土佐もありました。

大正一四年に土佐考古学会が組織されました。雑誌がでていると思いましたが出ていません。学会があつて雑誌がでていないというひとつの面白い例です。

昭和二四年、高知県では本格的な行政による最初の発掘調査が宿毛貝塚で行われました。薄い報告書ですが、戦後のこの時期に報告書が刊行されたという事は驚くべきことであります。

中村市の入田遺跡は縄文時代と弥生時代初めの資料が一緒に出たという事で学界で注目を集めました。岡本健児先生の若い頃の最大の業績といわれています。昭和二〇年代は静岡県の登呂遺跡、群馬県の岩宿遺跡、福岡県の板付遺跡が発掘調査されました。こういうのは非常に大きな力でもってなされました。日本文化の発祥の試金石が登呂にある、ということ、全国の調査員を集めて鳴り物入りで調査が行われました。そのようなとき

に高知では宿毛貝塚の本格的な調査が行われ、直ちに報告書が出されました。地域考古学の先駆的事例として位置づけられる必要があります。

日本考古学協会の中で率先して重要な役割を担われたのが、岡本先生です。そして協会は日本を代表する学会に成長しました。

岡本先生のお仕事の中で感銘を受けたのが、昭和四一年刊行の『高知県の考古学』です。吉川弘文館から郷土考古学叢書が出るということで、一冊目は奈良県で、二冊目は高知県でした。その中で「発見されたどのような小さな遺跡遺物も粗末に取り扱わずそれらをできる限り記録し、検討する」これが自分の考古学、と書いておられます。世間一般には新聞に載るような歴史を覆す大発見、金ピカ物のいわゆる宝物を扱うのが考古学と思われていますが、「資料をもとに考える」というのが考古学である、と岡本先生はいわれています。このような考えが入田遺跡の発見に繋がり、その後の高知県の考古学の発展のもとになったと思えます。もうひとつ、昭和四三年と四八年に

『高知県史』考古編、『高知県史』考古資料編が出ています。考古資料編の冒頭で考古編出版以降その後の新発見された資料、調査の状況を述べられています。県史は時間が経てば新しい材料が当然出てくるわけで、これは先生の学問に対する良心の発露であろうと思います。それと

『高知県史』考古資料編は『高知県史』考古文献資料編ともいう内容になっています。私はこのお考えを真似して品川区史の編纂では過去の文献資料を全て入りたいと考えました。編集長の児玉幸多先生は考古資料編には「土器とか石器の写真を出すように」とおっしゃいました。私はそうではなく、「過去の先輩の業績を網羅して整理したい」と申し上げました。岡本先生は地域の考古学を考え、記述していくためには三つのことが重要と述べておられます。一つに通史、二つ目に過去の文献資料、三つ目に考古資料の収録です。『高知県史』ではまさにそれを実践して書かれています。

昭和六二年には『土佐神道考古学』を出版されています。最近「祭祀考古学」と言う言葉を使います。この本は地域の名前をかぶせた「神道」とタイトルのついた唯一の本ではないかと思えます。ご専門の神道分野を中心とした本で、近い将来この本の続編をお出しになるのでは、と楽しみにしています。昔は「神社考古学」と呼ばれていた分野でしたが、「佛教考古学」という分野が出てきたことで「神道考古学」ということになりました。考古学は扱う範囲が広く、歴史の奥行きを考えると重要です。

岡本先生は平成元年に『日本の古代遺跡—高知』を出され、新しい研究視点を示されています。地域の特色を出して川筋に沿ってお書きになっています。この

考えを踏襲して埋文センターが土佐の考古学展を開催しました。地域の考古学を考える上で重要な意味を秘めています。

土佐の考古学で先鞭をつけられたのは寺石先生です。いろいろな方から来た手紙をきちんと表装してとっています。今流にいうとなんとオタクキナーな方がいたんだらうと思います。

広田典夫先生は古墳時代須恵器の研究に意欲的でした。木村剛朗先生は幡多地域の縄文時代について研究を深められています。そして宅間一之先生がいらつしやいます。これらの先生の力があつて埋蔵文化財センターの仕事に活かされるのではないのでしょうか。平成三年に開設された埋文センターは大変な仕事量をこなされています。発掘調査をしてそれをまとめ、公表しなければなりません。そういう意味で報告書を出すというのは発掘者に課せられた義務であります。今年三月に報告書の第六〇集目を刊行されています。これは大変な数です。長い間多くの人の力で研究されてきたことが、今後は新しい方向に転換していくことと思えます。

次に最近、調査が進んできました古代の道に関することについて述べさせていただきます。従来、古代の道路の幅は文献、歴史地理学の研究成果から二メートルとされてきました。近世の東海道も幅二メートルありません。中世の道もあまり幅がありません。しかし、発掘調査では古

代の東海道は幅が二メートルあったことがわかってきました。そして東京で東山道の発掘調査が行われました。幅は二メートルありました。四段階の時期で道幅が変化し、最終段階では幅が八メートルになりました。しかも直線道路でした。その延長上に谷が存在していましたが、そこは大土木工事を

行っていました。谷の底に材木を敷き詰めて、その上に小枝を敷き詰めて、さらに木の葉を敷いていました。八〇センチくらいそんな層がありました。そして橋をかけていました。栃木県でも古代の道路が発掘されました。そこも幅二メートルの直線でした。その延長上に山と古墳がありました。やはり道はその丘陵を切っていました。古代の道路は谷は埋め、土橋を架け、山は削って造るということがわかりました。古代の律令体制においては大規模な土木工事がなされました。北陸道は幅が六メートルありました。古代の道路は単なる道ではなかったと思えます。軍事道路であり、経済上重要な道だったのです。古代ローマの道路、中国隋唐時代の道路、全て大規模なものです。我々は中央集権的な体制の中では道路の整備が重要ということを世界史で学び、頭の中では知っていたことでありましたが、土佐の律令体制を考える上でも道路の調査研究は重要です。

ついで中世のお金の問題についてです。一カ所で万単位で銭貨が出土することが全国的に見られます。それは永楽通宝を

伴う場合と伴わない場合とがあります。伴わない場合はもつと古いと見られるのではないのでしょうか。鑄型が出土しており、日本で作ったことが明らかで中国銭（模鑄銭と呼んでいる）も含まれており、それは識別しなければなりません。そんな識別は不要であるという批判を受けた

ことがあります。皇朝十二銭と寛永通宝以外は全て渡来銭が流通していたということがわかってきて、ようやく本銭と模鑄銭を識別すべきということがいわれるようになってきました。中世の例では従来、一括して多量に発見されるので備蓄銭といわれてきましたが、用語としては適当でないので渡来銭といわれています。最近では地主神（神仏）に捧げるための埋納銭貨ということで奉養銭と呼ぶ研究者もいます。石川で地主神に捧げたと書かれた文字がでてきました。今まで出てきた物を新しい見方で見直す必要があります。大量の銭は重いためのか、出てきた場所には海岸線（みづぎ）がある場所、あるいは川筋でした。一括埋められた銭については考古学の重要テーマになるのではないのでしょうか。備蓄銭か奉養銭かということが論議され、それぞれの立場が相容れない主張をしあっています。性格がはっきりした段階で名称を付けることを考えた方がよいと思いますので、私は埋没留置銭（埋置銭）という言葉を使いたいと思います。

最近の考古学で論議されていることは

地域の考古学においても無縁ではありません。そして地域から全国的に情報発信をしていくことも必要です。具体的事例を検討提案していただき、先輩諸先生の功績を踏まえて研究は今後とも展開されていくのではないのでしょうか。

一〇周年を迎えた歴史民俗資料館は今後高知県の歴史研究のうえで大きな役割を果たすのではないかと私は考えています。「高知新聞」に連載されている「今を生きる 土佐の文化遺産」を読みました。ぜひこれを単行本にまとめてもらいたいと思います。地域の研究が情報発信され、それが展開された時に初めて地域の研究が全国的な歴史研究に反映されるのではないかと、思いますので地域の新聞の果たす役割は大きいと思います。どんなにすぐれた研究がなされてもそれが一般の人々に理解されないと意味がありません。関心をもっている人もさることながら、一般の人にも情報を積極的に提供しなければなりません。

今回の展覧会を多くの人に見てもらいたいと思います。歴史の資料を通して心を将来に伝えていく、このような企画をなさった館員の方々に心から敬意を表します。歴史民俗資料館が今後の一〇年を目指して新しい研究を展開していただくことを期待しています。

催しもの 2002年1月～3月

開館10周年関連企画展

「ふるさと土佐のおもちゃとおひなさま」

2月2日(土)～4月7日(日)

ふるさと土佐でつくられ愛されてきたおもちゃを山崎茂さんの郷土玩具コレクションから紹介します。よさこい節に歌われた坊さんかんざしの「はりまや人形」や捕鯨の姿を伝える「鯨船」、香泉人形の「しばてん」や「つればり」など約300点を展示します。ユーモラスで南国情緒に満ちた土佐ならではの郷土玩具です。

また、春爛漫の季節に合わせて日本各地の郷土玩具のおひなさまなどを約200点紹介します。土人形や張り子のおひなさまは素朴でかわいらしく、見る人の心を和ませます。そればかりでなく、土地ごとに特長のあるおひなさまは文化の多様性や伝播を語るものでもあるのです。

歴史館が贈るこどものための企画展です。「郷土玩具であそぼう」コーナーもつくりまします。こどもの心を大切にもち続けている大人の方にも、ぜひご覧いただきたいと思ひます。

○展示室トーク 山崎 茂さん

2月2日(土) 14～15時

3月9日(土) 14～15時

定員 30名(事前の申込み不要です。入館料が必要です。)

○ワクワクワーク(電話か電子メールでお申込みください。)

大人も子どもも参加可能)

「土佐民話の家⑧春の話」定員 30名

平成14年3月2日(土) 14時～15時

「張り子をつくろう」定員 30名

①形をつくる 3月16日(土) 14時～16時

②色をつける 3月23日(土) 14時～16時

○史跡めぐり

仁淀村秋葉まつり 2月11日(祝・月)

定員26名。専用の申込書をご請求ください。

申し込み締め切り1月22日(火)



次回企画展 ハッケヨイ! 郷土玩具

金太郎さんと土佐のおもちゃ

2002.4.26(金)～6.30(日)

山崎茂さんの郷土玩具コレクションから金太郎をはじめ飾り馬や加藤清正など、端午の節供人形を展示します。



出版物のご案内

特別展図録

「土佐・2000年

～21世紀へ伝える文化遺産～」

1200円(税込)

送料 310円



企画展図録

「長宗我部元親・信親の

栄光と挫折」

800円(税込)

送料 310円

岡豊風日(おこうふうじつ) 第42号
平成十四年一月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1-099-1
TEL 0888-862-2211
FAX 0888-862-2110
開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)
にあたる場合は翌日、12月28日
～1月4日、臨時休館日あり
通常期「常設展」大人(18歳以上)
450円・団体(20人以上)300円
高校生以下、療育手帳・身体障害
者手帳・障害者手帳・戦傷病者手
帳・被爆者健康手帳所持者とその
介護者(1名) 高知県及び高知市
長寿手帳所持者は無料

〈ひとこと〉
新年明けましておめでとうございます。
昨年は、企画展「居徳遺跡」、特別展「土佐・二〇〇〇年―二一世紀へ伝える文化遺産―」、企画展「長宗我部元親・信親の栄光と挫折」にご来館いただき誠に有り難うございました。また、資料ご所蔵者の方には貴重な資料をご出品いただき誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。本年もよろしくお願ひいたします。
館職員一同



月・日	主な出来事
10/19	「長宗我部元親・盛親の栄光と挫折」開幕
11/10	秦 政博氏講演会
11/24	展示室トーク
12/1	史跡めぐり
12/15	展示室トーク
12/16	〃
12/16	企画展閉幕
12/22	もちつき

http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/
E-mail:rekimin@tosa.net-kochi.gr.jp